

女子供の反乱

信田園多恵子

女子供

の反舌

信田
多面心子

女子供の反乱

昭和五十一年一月五日印刷
昭和五十一年一月十日発行

著 者 富岡多恵子

発行者 高 梨 茂

印 刷 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一
電話（五六一）五九二一

振替東京二―三四

©一九七六 検印廃止

目次

I インベーダーの出現……………7

ことばなき世代の謀叛 8

インベーダーの出現 21

虚像の男たち 26

若もの文化の時代 38

II 義理が重たい女の世界……………43

女の義理 44

女の本音 57

『女大学』について 69

へ母の訓へとは何ぞや 81

女教師と母親 93

男女平等?! 97

■ 知られたくないお里 101

知られたくないお里とは何か 102

住み方という表現 115

おふくろの味はほんとおいしいか 128

芸人の芸と生活 140

IV 明日の風 153

フィンランドの夏至祭 154

毎食のファッション 166

夢の舞踏会 署名の流行 男の夏服 中年

カルチャー不在 おばあさんの服 ミーハー

革命 局所暖房の思想 キモノとともに去る

もの ウサギの毛皮 制服 タフなおし

やれ マイ・ヒューマニズム

贈るということ 187

明日の風

190

思うひとには思われず　絶望からの出発　質

問ぜぬ　良心とはなにか　夏休み　子連れ

星　人間の墓　通　辞　丸坊主の論理

末摘花　人間の子供　学校の勉強　言葉の

内容　ジーンパンとキモノ　女のたたかい

神々の死　美容院文学　おとなしいカップル

ズ　色は匂えど　赤いダルマ　テレビ芸

新聞の文章　手持ち無沙汰　ハグレ者　無

一物

恐怖の千人針——あとがきに代えて

228

装幀 菅 木志雄

女子供の反乱

I インベーターの出現

ことばなき世代の謀叛

今年の正月、近所の家で小学校の女の子にさそわれてゲームをした。そのゲームはなんという名前ものかわからないが、一種のスゴロクで、ただ規模が大きく、内容がたいへん複雑にできていた。上りのところまでいくのに、まずみんな小さなプラスチックのクルマを買い、そのクルマにプラスチックの棒でできた家族を乗せていくのであるが、自動車保険やら、奨学金制度やら、株の失敗や配当やらと、今のオトナの世界のたいいていのルールがそこにあり、思いがけぬ逆境におちてなかなかすすめぬようになっていた。

はじめはそのゲームの、あまりにも複雑なルールにおもしろがっていたオトナのわたしはだんだんわびしくなり、退屈になっていったが、小学校の女の子たちは熱心に株の配当を計算したり、保険金の受渡しをやっている。外国留学のコースに当ると大よろこびしている。そのゲームのバックグラウンド・ミュージックとして、そばのステレオにはフィンガー・ファイブの

レコードがまわしてあった。そのレコードは、お年玉で買ったものだということだったが、子供のお年玉で二千円ぐらいのレコードを買うのは、このごろでは困難なことではない。

自分の家の中に小学校ぐらいの子供がいなくて、たまにこういう体験をするとやはり驚きを感じる。ただ、驚きは感じるけれども、子供たちのやっているそういう遊び方をけしからんとは思わない。というのは、わたしの驚きの中には、オトナが子供の遊び道具をこんな風につくっているのかという驚きが大きいからである。テレビで、ミニ・カーが電気のスィッチひとつで走る、複雑な高速道路を何重にもつった都会の模型のようなものを宣伝にしていたのを見たことがあるが、その時も、オトナの発想とその商売のやり方に驚いたが、それで遊んでいる男の子を見た時はそれほどなかった。

こういった子供の遊び、及び遊び道具の文明化（？）に対して、昔の子供は竹トンボで遊んだ、お手玉で遊んだ、ケン玉で遊んだ、といい、棒きれ一本石ころひとつをさまざまなものにする想像力があつた、という風なオトナの反発はどこかにあつて、子供の遊びに文化がなくなってしまったと嘆くことは簡単にできる。子供の遊び道具を勝手に文明化して提供し、それを商売してきたのも、一時の子供への媚びのために与えたのも、他ならぬオトナ自身であることはタナに上げて、安易に嘆いている。そしてオトナは今の子供の遊びの世界とだんだんへだたりができたことを啞然として眺めているしかない。今や、竹トンボやお手玉やケン玉は、オ

トナのための民芸品となって、オトナの追憶や郷愁を相手とする商品になっている。

いつの時代にも、今どきの若い者は、というオトナの嘆きやキメツケやたまに賞讃はあるが、ここ十年余りは、それらの上にわからないという文句が加わった。今どきの若い者はわからない、という声があちこちから聞え、わからないままでうっちゃっておくには、わからないさが次第に大きくなる恐怖もうまれつつある。しかも、わからないという年齢的間隔がきわめて狭くなり、二十代後半の人間がもうすでに二十代前半や十代後半の人間のことわからないなんていう場合もある。勿論、わからないという側に立つことで、得体の知れぬ優位を感じたいという若者特有の、老成志向のごときものが、五年しかちがわぬ年下の人間をわからないといわせることがあるから、差引いて考えねばならないが、それでも、かれらのわからなさをウソばかりとはいえないだろう。

小野田寛郎さんとルバング島（小野田さん自身はルバン、という呼び方に固執しておられるが）で出会った鈴木紀夫という二十五歳の若い男性のことが最初に新聞に出た時、新聞によってその表現は異っただろうが、ある新聞にはその青年が、なにか身元もはっきりせず、いうこともいい加減なところがあって、ややウサン臭いところがある人物だから、小野田さんのこともまだ明確ではない、という風に出た。もしも鈴木紀夫さんが（新聞などで鈴木青年とよく出ていたが、わたしには青年と呼ばれる規程がどこにあるのか不思議である）大学院の学生とか、

ルバング島に調査旅行中の文化人類学の研究者とかのパスをもっていたら、はじめからどこかヘンなところがあるとはキメツケられずにすんだであろうが、鈴木さんはたんなる旅行者であつたし、小野田さんのことがみんなに信じられてからも、パンダか雪男かオノダさんかと思つてたなんていうものだから、彼へのウサン臭いという一時の評判は消えなかった。

しかし、最初の胡散臭いという感覚は、オトナの若い人間へのわからなさをあらわしていたのではないだろうか。多くのオトナは直立不動の姿勢で出現した小野田さんの方に注目し、さまざまな意味あいで感動したり反発したりしただろうが、いずれにしてもオトナの胸深く小野田さんはつきささって考えられたのに比べて、鈴木紀夫さんの方はずっとわからないまま放っておかれることになった。

まず鈴木紀夫さんに限らず、金も目的もないのに、フラフラと外国へさまよい出て、ありとあらゆる陸地の乗物をタダで乗りつき、一年も二年もクニを留守にする若い者の真意はつかめない。ジャル・パック式の海外旅行を、結婚前におくという若い女の子の気持はまだ理解されるが、外国を放浪する方は理解されないどころか、どこかで非難がましく眺められる。雨の日に、新聞配達のアルバイトをしていた鈴木さんが、向うからきたベンツがスピードをおとさずに通りすぎてドロ水を頭からかぶったことがあり、その時クルマに乗っていた髪の白い老人の顔は忘れないといい、その時、日本を出ようと思った、と最初の放浪のことを書いていた

が、そんな単純な理由を、だれもオトナはマトモにわからなさの解明に利用しようと思わないだろう。そういう単細胞的な感受性では、複雑な世の中に生きてはいけぬと思うのが普通だろう。

しかし、クルマのドロ水をかぶったから日本を出ようと思ったとたとえ鈴木さんというひとが書いたとしても、わたしはそれをその言葉通りに信じない。それは嘘ではなく、また鈴木さんはさしずめそうとでもいうしかなかったかも知れないが、じつは言葉にできぬところの、なにかがあり、それが放浪におもむかせたのかもしれないと思うからである。パンダか雪男かもまた同様であり、日本文化を知りたかったからオノダさんに会いたかったとあとでいったのも、同様にわたしはその言葉にこだわりたくない気持がする。わたしはその言葉を信じないというより、既成の言葉で自分を表現して伝達することをあまり信じていないひとりの人間を感じる。

この鈴木さんを、あるジャーナリストが直撃インタビューしていろいろ話を聞いているのを週刊誌で読んだことがあるが、その時も鈴木さんの言葉のアイマイさよりも、なにがなんでも自分の言葉の論理性で鈴木さんのアイマイさを裁断しようとするジャーナリストの方の態度にわたしはおそれをなした。そのオトナのジャーナリストであるインタビューには、アイマイなものもすべて言葉によれば明確にして提示できるのであるという信念が信仰がみられた。結

局、今いわれたことはこうこうということになりますね、という風な態度がどこかにあり、世界のあらゆる沈黙して語らぬものも、言葉によればキメツケができるという態度がオトナの質問者のどこかにあった。

言葉というのはたして、そんなに便利なものだろうか。世間の知恵としてウラを読むということがあるように、多くの人間にとっては、言葉を伝達の道具として使っているが、そのウソとマコトのからくり精通して本音を伝達していく言葉遣いの専門家ではないから、言葉がいかに自分のいいことをうまく伝えてくれないのかを体験的に知っており、それでいて一方では、新聞や雑誌、テレビなどのマス・コミュニケーションでの他人の言葉をあつさりとそのまま信じるという矛盾をもっている。多くの人間にとっては、言葉は日常の中で私的なものであるが、それがなにかのキッカケや必要で公的にされねばならぬ時、公的に言葉をあやつる訓練がされていないから、公的に使われているらしく思われる言葉のパターンを真似るしかないのである。結婚式などの挨拶はそのいい例で、たいていはなんらかのパターンを踏襲している。

だから、新聞や雑誌やテレビのマイクが並ぶ記者会見のような場所に、普通の、私的言語で暮している人間がとつぜんひきずり出された時に、言葉の虚実皮膜を知っていないからホントのこともウソのことともはつきりいえなくて当然である。おそらく、横井庄一さんも小野田寛郎

さんも鈴木紀夫さんも、そうであつただろう。ところが、そのひとたちの言葉を聴く多くのひとは、その言葉しかかれらをまず知る手だてはないからでもあるが、とにかくそれらの言葉を信じて、そこからすべてを考えてみようとする。それらの言葉を信じないところからははじめない。少くとも、それらの言葉からこぼれ落ち、言葉にはならなくて言葉のまわりでうごめいているものを想像しようという根気はあまりない。これは、人間が同じ社会で使っている言葉は、文字通りの共通語であつて、疑いなく通じているとする怠惰な信仰からきている。

三十年間の、人間の集団社会から隔絶されたところに住んだひとがいった、上官の命令がないと出ていかない、というみじかい言葉を、そのまま受けとっていいだろうか。それは、とつぜん公的な場所で言葉を使うことを余儀なくされた人間（小野田さんは軍隊という公的な言語を使って生きる組織に長らくいたが、軍隊よりもさらに公的なところへ出されたわけであるから）がした、せいっぱいの、言葉による言葉の謀叛ではないだろうか。

オトナの感じる若い人間へのわからなさには、かれらの言葉のなさにも原因があるように思われる。かれらは、オトナが信じて使っている言葉によって、かれらの考えていることや行動を説明しようとしなない。というより、オトナの使っている言葉では間に合わないのかもしれない。というのは、オトナの使っている言葉は（ことに公的な言葉は）だいたい記号化されてしまった言語の老人であつて、言語の原初的な意味内容がそこでは摩滅してしまっているから